

現役合格への 軌跡

2025 年度 阪大世界史 第 1 問〔文学部・外国語学部共通 問題編〕

今回は 2025 年度の阪大の第 1 問を解説したいと思います。この問題は文学部と外国語学部の共通問題です。18 世紀の黒海周辺の政治情勢やロシア帝国の拡大過程など、現在のロシアをめぐる世界情勢を踏まえた問題とも言えます。ぜひともチャレンジしてみてください。なお、本原稿における解答や解説は、大阪大学が公表したものではなく、研伸館が独自で作成したものになります。

大阪大学 令和 7 年度 前期 歴史総合・世界史探究問題

(I) 次の文章は、クリミア・ハン国(クリム・ハン国)の君主シャーヒン・ギライがロドス島(現ギリシア共和国領)において処刑された折に、オスマン帝国の詩人によって詠まれた詩である。これを読み、下の問い(問 1～問 2)に答えなさい。

帝王のお慈悲という名の乳で育まれた小鳥のくせに、馬乳酒を煽って乱心してその僥倖を拒んだ

自らを鷹と妄信し、しかし血塗れた鷲のような処刑人たちを見るや怯えて雀さながらに身をこごめ

「翼はたたみました、どうかお助け下さい」と言い、カラスのような黒い顔で泣きわめく

ほんの短い間、異教徒どもの酒と豚肉を飲み食いしただけで「余はロシア人の慈悲に養われた」と恐れげもなく放言していたくせに

(中略)

偉大なるチンギス・ハンの血族の誉はいまや汚れた、このような過ちを仕出かした者がその末裔であるとは思われない

(スュンビュルザーデ・ヴェフビー作「飛鳥の頌歌」(1787))

問 1 シャーヒン・ギライはなぜ処刑されたと考えられるか。当時の黒海北岸と南岸の状況、およびこの詩の内容を踏まえて答えなさい (150 字程度)。

問 2 下線部に関して、15 世紀から 17 世紀末までのモスクワを中心とする国家の勢力拡大を、その東方の勢力との関係に着目して、説明しなさい (150 字程度)。

2025 年度 阪大世界史 第 1 問〔解答解説編〕

【解答】

問 1

キプチャク＝ハン国より分裂し、黒海北岸のクリミア半島に建国したクリミア・ハン国は、黒海南岸を支配するオスマン帝国の支配下に入った。しかし 18 世紀末にロシアによってクリミア・ハン国が併合されると、非イスラーム国のロシアに服従したことを非難されたシャーヒン・ギライは、オスマン帝国によって処刑されたと考えられる。
(154 字)

問 2

モスクワを拠点としたモスクワ大公国は、東北ロシアを統一し、イヴァン 3 世時にキプチャク＝ハン国より独立した。さらに東方のガザン＝ハン国を滅ぼし、シビル＝ハン国を征服してシベリアに領土を拡大した。17 世紀に成立したロマノフ朝は、ピョートル 1 世の時代に極東方面へ進出し、同世紀末に清とネルチンスク条約を結んで国境を画定した。(157 字)

【解説】

問 1

阪大の世界史の特徴として、史料を読み取り、考察して論述するという問題が出題されます。共通テスト世界史でも史料問題が出題されますが、史料問題の読み取りレベルは共通テスト世界史とほぼ同じです。「いつの時代か」「何について書かれているのか」を素直に読んで、「歴史の知識」によって解いて下さい。

論題は以下となります。

【論題】

シャーヒン・ギライはなぜ処刑されたと考えられるか。

[条件]

当時の黒海北岸と南岸の状況、およびこの詩の内容を踏まえる

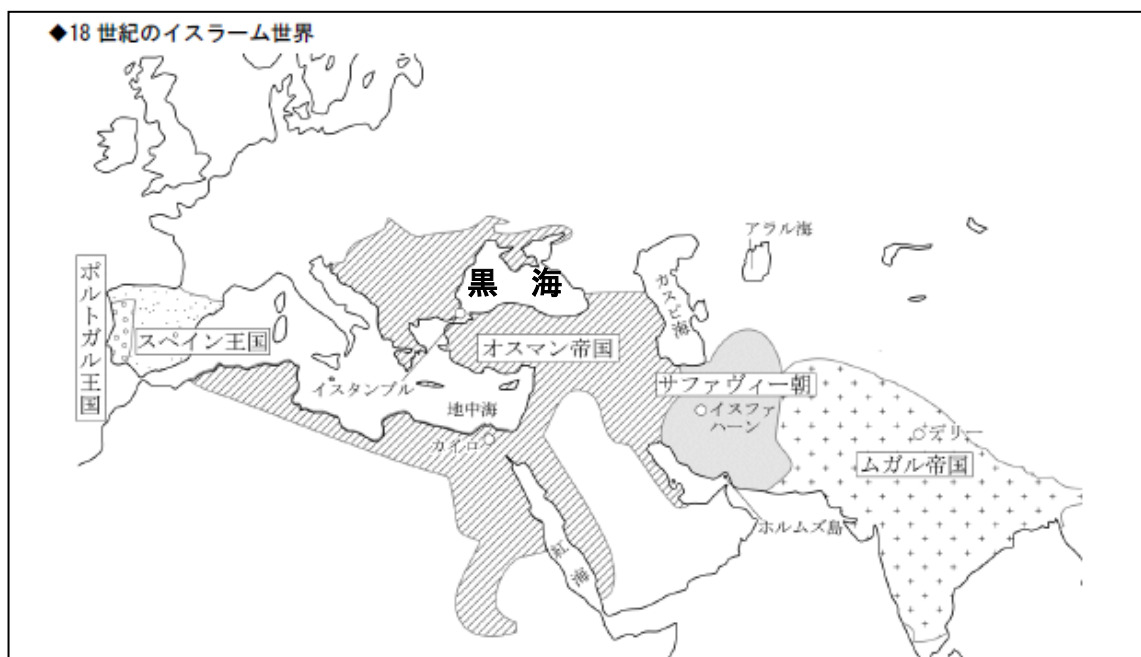
論述問題の一番のポイントは「問題文」にあります。つまり、シャーヒン・ギライとは「問題文」にあるように、クリミア・ハン国（クリム・ハン国）（以降はクリミア・ハン国で統一）の君主です。**クリミア・ハン国はその名の通り、黒海北岸のクリミア半島に建国した国です。**そして当時とは「問題文」である史料、詩の最後にある（スュンビュルザーデ・ヴェフビー作「飛鳥の頌歌」（1787））に注目して下さい。この詩は“1787 年”に書かれたのものです。ここからこの問題は“18 世紀にクリミア・ハン国の君主がなぜ処刑されたのか”であることを考察することになります。

現役合格への 軌跡

さらに論題の[条件]である当時（18 世紀）の黒海北岸と南岸の状況を「歴史の知識」で確認してみましょう。



当時、18 世紀の黒海周辺の状況が思い浮かびますか？下の図は研伸館の世界史のテキスト『体系化する世界史』より抜粋したものです。



この図から黒海南岸はオスマン帝国領であることがわかります。

また、同じく研伸館の世界史のテキスト『体系化する世界史』より抜粋したものです。

エカチェリーナ2世（位 1762～96）

北西ドイツの小諸侯の出身であったエカチェリーナ2世は、ロシア皇帝ピョートル3世に嫁いだ。しかし無能な夫を見限り、ロシアの近衛連隊を味方につけてクーデタを起こし、夫を退けて帝位に就いた。彼女は後進的なロシアを、ヨーロッパにひけをとらないくらいの強国へと成長させた。また啓蒙専制君主として、法治国家と人道主義を唱えたが、ロシアの現状に合わず、次第に（特にフランス革命後）反動化していく。

○啓蒙専制君主 フランスの文芸に傾倒。ヴォルテールと文通し、ディドロを宮廷に招いた。
○農奴制の強化 → コサック中心のブガチョフの農民反乱（1773～75）が起こるが鎮圧された。

<領土の拡大>

- ・千島の領有 → 日本に使節（ラクスマンを根室に派遣）・オホーツク海・アラスカへの進出が本格化。
- ・オスマン帝国と争ってクリミア（クリム）＝ハン国を併合 → クリミア半島にセヴァストポリ軍港を建設
オスマン帝国とは第1次露土戦争（1768～74）で争い、1774年にキュチュク＝カイナルジ条約を結んでいる
- ・ポーランド分割を強行する。

◆ロシア帝国の拡大

■ 1462年のモスクワ大公国（イヴァン3世即位時）
■ 1796年までの獲得（エカチェリーナ2世時代まで）

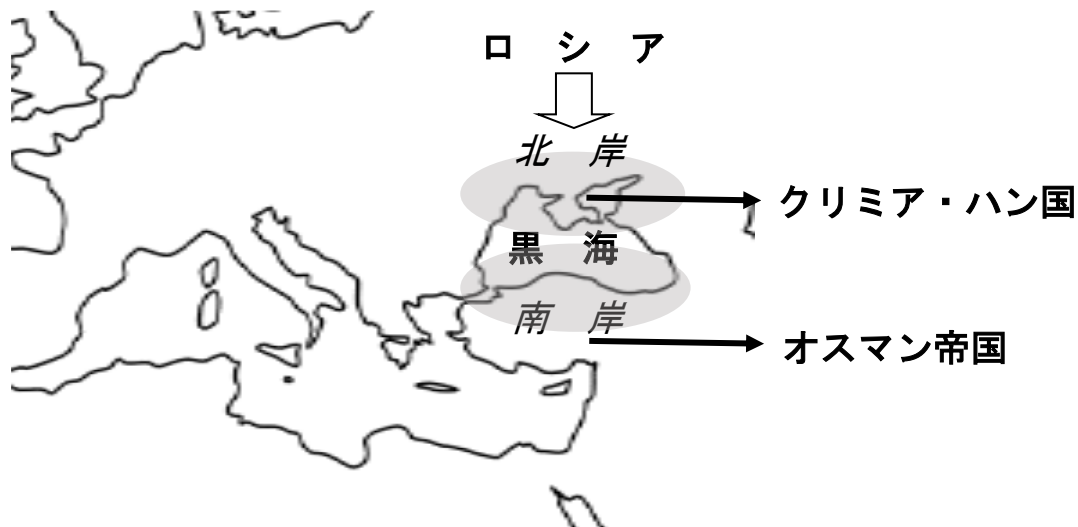
①

エカチェリーナ2世

18世紀の黒海周辺として、ロシアの南下政策が思い浮かびますか？

エカチェリーナ2世は第一次露土戦争（1768～74）でオスマン帝国に勝利し、1774年のキュチュク＝カイナルジャ条約でクリム・ハン国を保護国化し（矢印①）、さらに1783年にクリム・ハン国を併合します（矢印②）。

現役合格への 軌跡



最後に詩の内容をふまえてみましょう。

この詩の作者であるスンビュルザーデ・ヴェフビーは**オスマン帝国の詩人**です。

帝王のお慈悲という名の乳で育まれた小鳥のくせに、馬乳酒を煽って乱心してその僥倖を拒んだ

→帝王とはオスマン帝国のスルタンであり、その庇護下にあったが、

それを拒否したととれます。(馬乳酒とはモンゴルなどの草原の民が好むお酒です)

自らを鷹と妄信し、しかし血塗れた鷲のような処刑人たちを見るや怯えて雀さながらに身をこごめ

「翼はたたみました、どうかお助け下さい」と言い、カラスのような黒い顔で泣きわめく

→処刑される際に命乞いをしているシャーヒン・ギライの様子です。

(シャーヒンとはペルシア語で鷹のこと)

ほんの短い間、異教徒どもの酒と豚肉を飲み食いしただけで「余はロシア人の慈悲に養われた」と恐れ
げもなく放言していたくせに

→この部分でシャーヒン・ギライがイスラームでは禁忌である豚肉を食べ、

異教徒であるロシアの保護下に入ったことがわかります

(中略)

偉大なるチンギス・ハンの血族の誉はいまや汚れた、このような過ちを仕出かした者がその末裔である
とは思われない

→クリミア・ハン国はキプチャク＝ハン国より分裂した国です。

そのため、シャーヒン・ギライはチンギス・ハンの血を引く者ですが、

オスマン帝国からロシアに乗り換えるという過ちを犯した、と述べています

以上から、シャーヒン・ギライが処刑されたのは「**オスマン帝国を裏切り、ロシアに
服従したから**」と考えられます。

問2

【論題】

15 世紀から 17 世紀末までのモスクワを中心とする国家の勢力拡大
[条件]

東方の勢力との関係に着目する

この論題で注意して欲しい点は 3 点です。

●15 世紀から 17 世紀末までとは？

○始点 15 世紀：1401 年～1500 年 ○終点 17 世紀末：1700 年頃のため、
“1401 年～1700 年頃のモスクワを中心とする国家の勢力拡大” が論題となります。

●モスクワを中心とする国家とは？

1480 年にキプチャク＝ハン国より独立し、**商業都市モスクワを中心としたモスクワ大公国が成立**します。しかしこのモスクワ大公国は 1598 年に王朝（リューリク朝）が断絶し、動乱時代となります。その後、1613 年にミハイル＝ロマノフがツァーリ（皇帝）となり、この結果、**モスクワを首都とするロシア国家、ロマノフ朝が成立**します。（後の 18 世紀に北方戦争の結果、ロマノフ朝の首都はペテルブルクになります。）

そのため、**モスクワを中心とする国家とは「モスクワ大公国」と「ロマノフ朝」**です。
この点をしっかり記述しましょう。

●[条件] 東方の勢力との関係とは？

勢力拡大の際に、**どのような東方の勢力との関係があったのか？**こちらもしっかり記述しましょう。

では、○始点 15 世紀：1401 年～1500 年 ○終点 17 世紀末：1700 年頃と、モスクワを中心とする国家と、[条件] 東方の勢力との関係とに着目して、論題をみていきましょう。

こちらは研伸館の世界史のテキスト『体系化する世界史』より抜粋したのですが、○始点である 1401 年～1500 年は「イヴァン 3 世によるキプチャク＝ハン国の独立」となります。

モスクワ大公国の台頭・独立

○イヴァン 1 世（位 1325～40）

・1328 年にキプチャク＝ハン国より許しを得て大公となる。

○イヴァン 3 世（位 1462～1505）

・1480 年にキプチャク＝ハン国より独立。（「タタールのくびき」の終了）

・ビザンツ帝国最後の皇帝の姪（ソフィア）と結婚。

→ツァーリ（“皇帝”の意）の名称と帝国の紋章（双頭の鷲）を継承し、モスクワを「第 3 のローマ」とする。

また、ロシア正教会がギリシア正教会の権威を継承

○イヴァン 4 世（雷帝）（位 1533～84）

・1547 年にツァーリの称号を正式に採用（ロシアの皇帝専制体制を「ツァーリズム」という）。

→諸侯・貴族を抑えて農奴制を強化。

・モンゴル系のカザン＝ハン国（ヴォルガ川中流域）、アストラハン＝ハン国（ヴォルガ川下流域）を征服。

・シベリア進出→コサックの族長イェルマークがシビル＝ハン国を征服。

現役合格への 軌跡

また、『体系化する世界史』より抜粋したのですが、
○終点 17世紀末：1700年頃は「1689年 ネルチンスク条約の締結」となります。

ピョートル1世（大帝）（位 1682～1725）

領土拡大（南下政策）に乗り出す。 目的は貿易拡大・軍隊進出のための不凍港を得ること

- ・アジア方面 1689年 ネルチンスク条約……清の康熙帝に南下政策を阻まれる。
- ・黒海方面 1696年 アゾフ海の戦い……黒海への出口を求めて、オスマン帝国から奪取。アゾフ要塞は落としたものの、これ以上南下すればオスマン帝国との本格的対立は必至。



ピョートル1世

↓

- ・ヨーロッパ諸国との親善の必要性
- ・軍備をはじめとする近代化（西欧化）
- ……優れた技術を積極的にとり入れ、できれば技術者を招き入りたい。

では、[条件]である東方の勢力との関係とに着目して、【論題】の「15世紀から17世紀末までのモスクワを中心とする国家の勢力拡大」を解説していきましょう。まず構想メモです。

●構想メモ

＜モスクワを中心とする国家勢力の拡大＞	＜東方の勢力との関係＞
○イヴァン3世時 モスクワを中心とするモスクワ大公国が キプチャク＝ハン国より独立 （ロシア東北部の統一）	→ 東方にはモンゴル勢力が存在
○イヴァン4世時 東方への進出 イエルマークによるシベリア進出	→ ガザン＝ハン国 アストラ＝ハン国 征服 シビル＝ハン国征服
○イヴァン4世死後 王朝の断絶、動乱の時代	
○ミハイル＝ロマノフ時 モスクワを首都とするロマノフ朝の成立	
○ピョートル1世時 1689年 ネルチンスク条約締結	→ 極東へ進出し、 清の康熙帝と国境を画定

構想メモは【論題】の「15 世紀から 17 世紀末までのモスクワを中心とする国家の勢力拡大」を左に、[条件] の東方の勢力との関係を右にメモ書きしています。

上記で述べた注意点に気をつけて、論題に沿った解答を書いてみて下さい。